

清末における中国人日本留学生の音楽活動の再評価 —学校教育と社会活動の連携に着目して—

郭君宇(東京藝術大学大学院)

博士論文は、清末期に日本へ留学した中国人留学生(以下「日本留学生」)およびその音楽団体の活動実態を対象に、日本の教育機関における在籍記録を基礎資料とし、日中両国の新聞・雑誌、名簿、個人著作など多様な史料を用い、彼らが日本で受けた西洋音楽教育をいかに社会的音楽活動へと展開させていったのかを明らかにすることを目的とする。学校教育と社会活動の連携という視点から日本留学生の音楽活動の背景と意義を再評価し、中国近代音楽史における新たな視座を提示するとともに、日中間の音楽文化交流に関する学術的理解の深化を目指す。

本論文は、日本留学生の在日期間から帰国後に至る活動の連続性に着目し、序論および結論を含めた全七部から構成されている。日本留学生が日本で受けた音楽教育は、彼らの多様な活動の基盤となるとともに、人的ネットワークの形成にも寄与していたことが明らかとなった。第3章では、日本留学生の音楽団体「亜雅音楽会」(1904)を中心に、新たに収集した史料を用いて、その学習内容および関連する諸活動を再検討した。これまで十分に注目されてこなかった活動や会員構成などに着目し、彼らが演奏会の開催や唱歌集の出版、募金活動などを通じて、組織的かつ社会的な実践を展開し、それらは資金調達や交流の機会を提供すると同時に、西洋音楽の普及や民族的自覚の喚起にもつながった。とりわけ女子留学生の積極的な社会参加は、女子解放運動を推進する上で重要な役割を果たした。

また、従来の研究が主に音楽専門家としての留学生の活動を扱ってきたのに対し、本論文は、専門家ではない留学生の実践にも着目し、その活動の不足を補った。また、清末期の米国留学生との比較を通じて、日本留学生が教育と社会活動を有機的に結びつけた実践的音楽活動を展開していた点に、その独自性が見られることを指摘した。

今回の発表では、日本留学生の在日期間における実践を中心に、その活動の多様性を手がかりとして、活動の特徴および独自性を明らかにする。